

1. 講義の概要

◆授業の趣旨

この法哲学講義は、学部学生のために、法実践の根底を成す哲学的諸問題についての概観を与えようとするものである。ここでは特に、現代法哲学の理論的成果を講義によって整理しながら、法的諸問題が抱える哲学的本性を体系的に明らかにし、法の深層構造の理解に努める。

◆授業の内容

はじめに現代法哲学の問題や方法のあり方を瞥見し、講義における問題関心やアプローチの視角を明確にした後、現代法哲学の理論的・応用的諸問題をめぐる整理と検討に移る。

今回の講義では、全体を三つのパートに分け、パート1では現代法哲学の基本的な問題関心のあり方について確認した後、パート2において、基本的には法観念や正義観念の歴史的展開を追いつながりながら、特に現代における法哲学上の諸論点を整理・検討する。そこでは、特に、法の概念、法的思考、正義の概念などが相互に交錯しながら法実践のあり方を規定していることに注意を払う。最後にパート3では、現代社会において論議を呼んでいる法的諸問題を選び、法哲学の観点から整理と検討を行う。

◆授業の方法

講述による。ただし、一回の授業で扱う参考書の関連部分や基本文献などをこのシラバスで示し、その内容を踏まえて、ポイントをまとめながら授業を進めてゆく。聴講者は参考書を予め読んでおくことを求める。講義では参考書に目を通してのこと、また後に参考文献を調べてみることを前提としたうえで、ポイントに深く踏み込みながら、考え、整理することを目的とする。それ故、講義のノートを取れば十分ということはない。

授業の冒頭には要点の概観を行い、また授業のまとめに再度要点を整理することで、議論のポイントを押さえるようにし、授業中には適宜質疑応答の時間をとる。講義では様々な理論のポイントを選別して、それぞれの見方の背景にある考え方についての理解を深めてゆくようにする。そして、まとめの部分ではそれらの議論を私見によって批判的に検討し、最新の議論状況や問題関心を伝えたい。

また、適当な区切りでレポートを課すが、その際には講義アンケートを実施して聴講者の感触を把握すると共に、オフィス・アワーおよびメールによる質問・学習相談なども受け付けて、聴講者とのコミュニケーションを確保したい。

◆教材・参考書等

テキストは特に用いない。参考書や講義の各回で参考とすべき文献などは、後にまとめて掲げる（→3.）。なお、必要に応じてコピー資料を配布する。

◆評価の方法

講義への出席は、病気などやむを得ない場合を除いて必須であろう（但し出欠は基本的にとらない）。また、レポートを3回ほど課し、それらすべてを提出したことを条件として評価を行う。

レポートは、各回、1,600字ないし2,000字程度を目安とし、A（優）、B+・B（良）、B-・C（可）、D（不可）で評価して、A=10点、B+=9点、B=8点、B-=7点、C=6点、D=4点と換算する。総合評価は、レポートが3回の場合には30点を満点とし、27点（9割）以上を優、23点（7割5分）以上を良、18点（6割）以上を可とする。満点の場合は秀を与える。

なお、病気・教育実習・留学等のやむを得ない事情のためレポート提出に支障が出るときには、個別に相談に応じるので、必ず連絡をすること。

◆オフィス・アワー

講義時間以外の質問・面談のためにオフィス・アワーを設ける。日時は毎週木曜日14時から15時30分、場所は法学研究科研究棟4階424号室（内線3309）。それ以外の場合はアポイントメントによる。また、メールによる質問や連絡なども受け付ける。アドレスは、

khase@ec.hokudai.ac.jp

◆ウェブ・ページ

その他の個人インフォに関しては、

<http://www.juris.hokudai.ac.jp/~hasegawa/works.htm>

を参照してほしい。

2. 講義のスケジュール

〔Part 1 法を哲学するということ〕

- | | |
|------------|--------------------------|
| 1 ガイダンス | ——講義の概要；講義スケジュール；参考文献 |
| 2 現代法哲学の問題 | ——建物の比喻；三つの階梯；5つの問題 |
| 3 方法・理論化 | ——健全な懐疑；理由の解明；批判的吟味 |
| 4 法と法律 | ——第一次制度と第二次制度；公共的視点；正義と法 |
| 5 法と政治 | ——権力と法；法の支配；憲法と人権 |
| 6 法と経済 | ——市場メカニズム；市場の制度性；市場と正義 |

- 7 法と社会 - 文化 ———公式法と社会の法；文化的多元性と法；法文化
- 8 法と言語・論理 ———言語と論理；規範的言語；法言語
- 9 法的思考 ———推論と思考；規範的思考；法的思考様式
- 10 法の客観性と価値の対立 ———法的懐疑論；法の実事；規整的理念

〔Part 2 理論的諸問題：法概念論と正義論〕

- 11 古典的法概念論 ———自然法論；法実証主義；法現実主義
- 12 法体系の構造 ———規範と準則；原理・政策・基準；位階と綱目
- 13 法の妥当とその根拠 ———「根本規範」；「承認のルール」；政治理論
- 14 法の規範性 ———規範性の意義；規範主義と道具主義；法の環境
- 15 法解釈と価値 ———解釈の技法；法解釈の不確定性；法的価値判断
- 16 法と道徳 ———法と道徳の異同；相互作用；パターナリズム
- 17 法的価値と正義 ———正義の位置；分配的正義；功利主義
- 18 現代正義論の展開(1) ———ロールズの正義論；ロールズ批判；自由と平等
- 19 現代正義論の展開(2) ———共同体主義；対話的正義；保守主義
- 20 正義・権利・法 ———権利の展開；正義と権利；権利と社会的厚生
- 21 正義のテクノロジー ———正義の実現；正義の総合システム；正義と社会秩序
- 22 政治的正義 ———政治的正義；立法と司法の位置；憲法の機能
- 23 近代法への批判 ———近代法の抑圧性；法の脱構築；正義論批判
- 24 法の協働とグローバリゼーション ———多元的法体制の展開；法の協働；法の相互作用

〔Part 3 応用的諸問題：現代社会と法哲学〕

- 25 生命倫理と法 ———生と死の倫理；法の構え；社会的合意形成
- 26 法文化の問題 ———法と文化；日本の法文化；文化の法
- 27 アイデンティティとジェンダーの保障 ———アイデンティティの問題；ジェンダー法理論；「批判的人種理論」
- 28 戦争と法秩序 ———ホッブズ問題；平和構築；暴力の統御
- 29 グローバル・ジャスティス ———グローバルな格差；国境の壁；正義の射程
- 30 全体のまとめと展望

3. 参考書とその他の参考文献

◆参考書

テキストは特に用いないが、基本的な参考書として、次の2冊を指定する。

・平野仁彦ほか、『法哲学』（有斐閣アルマ）

- ・田中成明ほか、『法思想史（第2版）』（有斐閣 S シリーズ）

これらは、現代法哲学とその思想史的背景に関して必要な基本的知識をまとめたものであり、通読してほしい。講義ではこれらを読んでいることを前提として、さらに深く話を進める。講義との関係は、後に講義トピック毎の文献案内に記す。

◆基本参考文献

講義のパート2全般に関連する基本参考文献として、次のものが有益である。

- ・中山竜一、『20世紀の法思想』（岩波書店）
- ・平井亮輔他、『正義』（嵯峨野書院）

講義のパート3に関連する基本参考文献としては、次のものが有益である。

- ・井上達夫編、『現代法哲学講義』（有斐閣）

◆一般的な参考文献

現代法哲学への簡明な入門的読み物としては、大学初年次向けにまとめられた次の2冊の本がある。参考になるだろう。

- ・長谷川晃・角田猛之編、『ブリッジブック法哲学』（信山社）
- ・深田三徳他編、『よくわかる法哲学・法思想史』（ミネルヴァ書房）

法哲学の代表的な概説書には、次の4冊がある。これらは、基本的な知識を得たうえでさらに勉強を深めるために重要なものである。それぞれ戦後日本の法哲学史において一時代を画した文献であり、独自の見地から議論が展開されているので、各々の特徴や異同を見極めながら、比較して読んでゆくのが望ましい。

- ・碧海純一、『新版法哲学概論（全訂第二版補正版）』（弘文堂）（『碧海／概論』）
- ・加藤新平、『法哲学概論』（有斐閣）（『加藤／概論』）
- ・矢崎光圀、『法哲学』（筑摩書房）（『矢崎／哲学』）
- ・田中成明、『法理学講義』（有斐閣）（『田中／講義』）

なお、最近も様々な法哲学の概説書が現れている。上記のものに付け加えて独自の特徴があるものとしては、以下が挙げられよう。

- ・大橋智之輔他編、『法哲学綱要』（青林書院）
- ・三島淑臣編、『法哲学講義』（成文堂）
- ・笹倉秀夫、『法哲学講義』（東京大学出版会）
- ・青井秀夫、『法理学概説』（有斐閣）

また、現代法哲学の成果へのガイドランスとして、英文ではあるが次のものが便利である。

- ・M. P. Golding, et.al. eds., *The Blackwell Guide to Philosophy of Law* (Blackwell, 2002)

これはペーパーバックで比較的安価に入手できるので、関心のある場合には購入するのも有益であろう。

この講義の基礎となっている哲学的パースペクティヴやアプローチに関して、まず基本的な哲学の態度に関しては、トーマス・ネーゲルの次の著作がわかりやすく、示唆に富んでいる。

- ・ T・ネーゲル[若松良樹他訳]、『哲学ってどんなこと？』（昭和堂）

さらに、この講義で志向する理論的アプローチの範型を示すものとして、ロナルド・ドゥオーキンの次の諸著作が重要である。

- ・ R・ドゥオーキン[木下毅他訳]、『権利論(増補版)』（木鐸社）
- ・ R・ドゥオーキン[小林公訳]、『法の帝国』（未来社）
- ・ R・ドゥオーキン[石山文彦訳]、『自由の法』（木鐸社）
- ・ R・ドゥオーキン[小林公他訳]、『平等とは何か』（木鐸社）

なお、この講義では立ち入って扱わない法思想史上の諸問題につき、示唆に富む概説書として、とりあえずは以下のものを推す。

- ・ 三島淑臣、『法思想史（新版）』（青林書院新社）
- ・ 恒藤武二、『法思想史』（筑摩書房）
- ・ 竹下賢他編、『トピック法思想』（法律文化社）
- ・ 笹倉秀夫、『法思想史講義』（東京大学出版会）

また、この講義でも触れる、現代社会において新たに現れつつある様々な社会問題との関わりで生ずる法哲学的問題に関する有益な参考文献として、とりあえずは以下のものを推す。

- ・ 竹下賢他編、『マルチ・リーガル・カルチャー』（晃洋書房）（法文化の問題）
- ・ 桜井徹、『リベラルな優生主義と正義』（ナカニシヤ出版）（生命倫理の問題）
- ・ 岡野八代、『法の政治学』（青土社）（ジェンダーの問題）
- ・ 上村英明、『先住民族の「近代史」』（平凡社）（民族への歴史的不正の問題）
- ・ 井上達夫編、『公共性の法哲学』（ナカニシヤ出版）（新たな公共性概念の問題）

◆講義トピック毎の参考書関連箇所

以下に、講義のトピック毎に基本的な参考書の関連箇所を示す。上記の平野ほか『法哲学』および田中ほか『法思想史（第2版）』をそれぞれ『法哲』、『法史』と略して示す。

講義パート1の第1、2、3回（ガイダンス・問題・方法）に関しては、『碧海／概論』、『加藤／概論』、『矢崎／哲学』、『田中／講義』のそれぞれ第1章、および『法哲』1章1節を参照されたい。

なお、『法史』1章から5章までは、講義で主として扱う近代以降の法哲学・法思想の歴史的源流が示されているので、各自通読をしておいてほしい。

- 2 現代法哲学の問題 — 建物の比喩；三つの階梯；5つの問題
- 3 方法・理論化 — 健全な懐疑；理由の解明；批判的吟味
- 4 法と法律 — 第一次制度と第二次制度；公共的視点；正義と法
→『法哲』6章1節
- 5 法と政治 — 権力と法；法の支配；憲法と人権
- 6 法と経済 — 市場メカニズム；市場の制度性；市場と正義
→『法哲』5章3節
- 7 法と社会 - 文化 — 公式法と社会の法；文化的多元性と法；法文化
- 8 法と言語・論理 — 言語と論理；規範的言語；法言語
- 9 法的思考 — 推論と思考；規範的思考；法的思考様式
→『法哲』5章1，2節
- 10 法の客観性と価値の対立 — 法的懐疑論；法の事実；規整的理念
- 11 古典的法概念論 — 自然法論；法実証主義；法現実主義
→『法史』6，7，9，10，11，12章
- 12 法体系の構造 — 規範と準則；原理・政策・基準；位階と綱目
→『法史』14章
- 13 法の妥当とその根拠 — 「根本規範」；「認定のルール」；政治理論
- 14 法の規範性 — 道具主義と規範主義；手続主義；「理由」論
⇒以上(12~14)『法哲』2章1，2節
- 15 法解釈と価値 — 解釈の技法；法解釈の不確定性；法的価値判断
→『法哲』5章1，2節
- 16 法と道徳 — 法と道徳の異同；法と道徳との相互作用；パターンリズム
→『法哲』2章3
- 17 法的価値と正義論 — 正義の位置；分配的正義；自由と平等
→『法哲』4章1，2，3，4節
- 18 現代正義論の展開(1) — ロールズの正義論；ロールズ批判；自由と平等
- 19 現代正義論の展開(2) — 共同体主義；対話的正義；保守主義
- 20 正義・権利・法 — 権利の展開；正義と権利；権利と社会的厚生
- 21 正義のテクノロジー — 正義の実現；正義の総合システム；正義と社会秩序
⇒以上(17~21)『法哲』1章2節、3章1，2，3節、
4章5，6節、および『法史』15章
- 22 政治的正義 — 政治的正義；立法と司法の位置；憲法の機能
⇒以上(22~23)『法哲』6章1
- 23 近代法への批判 — 近代法の特徴；近代法の抑圧性；法の脱構築
→『法哲』6章2

- 24 法の協働とグローバリゼーション——多元的法体制の展開；法の協働；法の相互作用
- 25 生命倫理と法 ——生と死の倫理；法の構え；社会的合意形成
→『法哲』6章3節
- 26 法文化の問題 ——法と文化；日本の法文化；文化の法
- 27 アイデンティティとジェンダーの保障——アイデンティティの問題；ジェンダー法
理論；「批判的人種理論」
→『法哲』6章2節
- 28 戦争と法秩序 ——ホッブズ問題；平和構築；暴力の統御
- 29 グローバル・ジャスティス——グローバルな格差；国境の壁；正義の射程
- 30 全体のまとめと展望

——各トピックをめぐる個別的な参考文献については、適宜紹介する。

以上